

## 国学者と美術家

## — 黒川真頼と小杉楡邨の「日本美術史」構築作業 —

佐藤岳流 (京都大学)

1880 年代末から 1900 年代初頭に向け、全国的な宝物調査と体系的な日本美術史の構築が車の両輪のごとく並行して一挙に進められ、古社寺保存法の制定と *Histoire de l'art du Japon* の出版でその成果が実を結んだことは広く知られている。

この宝物調査と日本美術史構築という大事業には、主導者岡倉天心や帝国博物館総長を務めた九鬼隆一をはじめ、多数の者が参加した。彼らの中には、「美術」を必ずしも関心の中心とせず幅広い範囲の歴史を扱うことができる者もいたが、これまでそうした者の仕事について深く掘り下げられることはほとんどなかった。本発表は、一般に国学者として語られる黒川真頼 (1829-1906) と小杉楡邨 (1834-1910) の宝物調査・日本美術史編纂事業における仕事に注目する。

黒川は 1877 年に内務省博物館史伝課長心得に就任した後、長きにわたり博物館の歴史部門に所属した。小杉は東京大学古典講習科講師などを経て、1889 年に帝国博物館歴史部美術部備となり、その後東京美術学校教授なども務めた。両者とも『古事類苑』の編纂でも知られている。

小杉は講演「美術と歴史との関係」で、自分を「美術論家或は鑑定家」ではない「書物よみの一老生」と称す一方、古い美術品から読み取れる史実の重要性を論じた。黒川は『國華』に「本邦絵画沿革説」を連載したが、この論考の目的は絵画の沿革自体ではなく、当時の社会の様子を論じることであると強調している。このように、彼らはしばしば意図的に「美術」と距離をとった。一方、二人は「美術」という新たな概念を記紀の記述を応用しつつ独自に解釈して論じており、新たな概念を拒絶したわけではなかった。

二人にとって「美術」はあくまで多岐にわたる仕事の一部だが、明治期の日本美術研究の進展において、彼らが果たした役割は決して小さくない。1870~80 年代に、二人はそれぞれ正倉院文書・御物の調査と整理を行い、近代における研究の基礎をつくった。岡倉は講義「泰東巧藝史」で、黒川の正倉院御物整理を古代ローマの発掘に匹敵する事件と評している。1880 年代末になると、黒川と小杉は東京美術学校の面々と共に全国各地へ足を運んで宝物を調査し、かつ宝物鑑査会議で国宝の等級付けに関わる重要な議論を行った。さらに同時期の帝国博物館における美術史編纂事業では、九鬼からの要請で多数の原稿を執筆し、それらは美術史全体の編者であった岡倉の手に渡った。黒川・小杉による発言・著作と岡倉の「日本美術史」講義や『稿本日本帝国美術略史』の記述を比較すると、例えば文献考証による法隆寺再建説の採用や薬師寺金堂薬師三尊像の制作年特定のように、国学の学知が取り入れられていることを指摘できる。

以上、本発表は世紀転換期の日本美術史構築作業における黒川と小杉の活動を明らかにすることを通じて、明治期日本における国学者と美術家の協同作業のあり方や両者の立場の不可分性を示すものである。